

## 古写真から辿る草津の歴史 —もうひとつの東海道と中山道の分岐点—



上：明治末期 中：昭和初期

ともに出典『草津市史資料集5 歴史写真集 ずっと KUSATSU』

下：現在

草津宿は「東海道と中山道の分岐点」として知られ、その分岐を示すのが、草津川マンポ（トンネル）横に立つ追分道標です。実は、この追分道標以外に、もうひとつ、東海道と中山道の分岐点を示す道標があるのをご存知でしょうか？かつて「大路井」と呼ばれた大路の覚善寺の門前に立つ道標です。

上2枚の古写真は、草津市史編纂の際に収集された写真で、それぞれ明治末期、昭和初期の道標を写したものです。明治19年（1886）、草津川マンポが建設されたことに合わせ、東海道と中山道の分岐点を移動させることになり、新しい東海道として「大路井新道」が造られました。その新たな分岐点に建てられたのが、大路井の道標です。道標の「右」の方向が小汐井神社の前を通過して石部方面へ向かう東海道、「左」が中山道となっています。

明治末期の写真では、覚善寺の角に道標が立っていますが、昭和初期になると、覚善寺の敷地の一角が商店や住宅に変わり、人の姿やバスも確認できます。

大路井の道標が立てられた3年後の明治22年（1889）には、草津駅が開業し、街の中心は「宿」から「駅」へと変わってゆきます。大正時代には、草津駅前とかつての宿場町を繋ぐ経路でもあった大路井の市街地化が進み、大路井新道沿いにも、多くの商店や住宅ができたそうです。2枚の古写真を比較すると、そういった大路井の変化の様子をうかがうことができます。

現在、この東海道と中山道の分岐点の周囲は、高層マンションや多くの飲食店で賑わい、かつての面影は、道標と覚善寺のみとなってしまいました。しかし、残された古写真からは、昔の街並みや人々の暮らしを、より現実のものとして知り、感じることができます。

（令和5年3月・草津宿街道交流館 岡田 裕美）